

「重度しょうがいしゃの介護保障の起源～介護人派遣事業の 成り立ちが重度訪問介護につながっている～」を聞いて、 あらためて今の社会に必要なことは何かを考えた件

元いちご会職員 金田 博之（かねた ひろゆき）

前置き

これは昨年9月25日、東京都多摩市の聖蹟桜ヶ丘で行われた「全国公的介護保障要求者組合」の会合にて（対厚労省交渉の前日でした）、元東京都福祉局障害福祉部在宅福祉課におられた山下正知氏（現全国盲ろう者協会事務局長）の講演を聴かせていただいたの私的な感想です。前号でお伝えしていた講演内容はこの感想にてお伝えいたします。（不安ですね。）

はじめに

『こんな夜更けにバナナかよ』という映画が大変話題を呼んでいる（この原稿は2月頃に書いてます）ようで、この通信の読者の方にも映画を観られたり、以前から原作本を読まれていた方もいらっしゃると思います。心より感謝いたします。（私が言う事ではない）

こんな話から書き起こしているのは、「バナナ」の主人公である進行性筋ジストロフィーの鹿野靖明さん（元いちご会の会計担当）がわがままといえる強烈な個性で地域の中で、何百人ものボランティアの力を借り自立生活を成し遂げた時代と、現在の在宅福祉の状況は「公的介護保障の充実」という点においては明らかに違っている（一応進んできている）からです。

しかし前号でも「声をあげなければ何も変わらない」と書かせていただいたように、黙っていて障がい者のための福祉予算が増え続けたり、新たな制度が創設されるというような事は今も昔もこの国の財政方針の中ではほとんどあり得ない話です。ましてや少数の人間のニーズ、たとえそれが基本的な人権上欠くことのできないものだとしても、結局、より多くの一般国民や大企業等が関心を持つ、あえて皮肉な見方をすれば、成果がより可視化できる（見えやすい）方が比較的予算というものは通りやすいというのが世の常です。

では鹿野さんのような長時間介護が必要な重度障がい者が病院や施設でなく自分が希望する地域での自立生活をするための公的介護保障は今、なぜあの時代より改善されていったのでしょうか。もちろん時代の流れ、人権意識の向上という必然的な力も無視はできません。しかしやはり一番大きかったのは障がい当事者の行政に対する声の大きさ、熱量、粘り強い交渉の成果だったのではないかと思います。今回山下さんが講演の中で丁寧に時系列に沿って話されたリアルな交渉の舞台、及びその舞台裏を聞くことが出来、やはり「黙

っていては何も変わらない」その思いを一層強くしました。

障がい者運動と公的介護保障

山下さんは1994年頃から東京都の障害福祉部におられて、「全身性重度障害者介護人派遣制度」という、障がい当事者が介護者を推薦して各市町村に登録しそこから派遣するという、現在で言うところのPA（パーソナルアシスタンス制度）に非常に近い方式が紆余曲折を経て、都内の当事者活動家、団体と、時には激しく対立し、時には一緒に頭を突き合わせながら全都で施行されていく過程に直接携わっていた担当者のお一人です。現在障がい者運動の歴史を語る上で必ず登場するようなそうそうたる方々と直接膝を交えて交渉に当たり、しかもその交渉の過程には、その後かなりの時を経て2013年に国会で批准された「障害者権利条約」にうたわれた「政策決定及びその過程には当事者が積極的に関わり連携をとる必要がある」という基本的精神をまさに当時より実践されていた方だという事に深い感銘を受けました。

まず、私が障がい者運動の歴史を思い返すとき、必ず頭に浮かぶのは脳性マヒの当事者団体「青い芝の会」の「川崎バスジャック事件」「脳性マヒの子供を殺した母親に対する減刑嘆願運動を批判する運動」そして今回の重度障がい者の公的介護保障につながっていく「府中療育センター移転阻止闘争」等々の歴史的な事件です。青い芝の会については当然山下さんも関わりを持っていますが、今回は講演議題が「公的介護保障の起源」という事もあり「府中療育センター闘争」の経緯から講演はスタートしました。（興味のある方は上記の他の運動についてもぜひ機会を見て調べてみてください）

1968年に開設された府中療育センターは私も1980年代後半に見学に行ったことがあります。完成時、東洋一と言われただけあってとても大きな収容施設で、私が見学当時は殆ど重症心身障がいの方々が入所生活をしていたように思います。（昔の事なのでおぼろげな記憶ですが）余談ですが、石原慎太郎氏が都知事時代の1999年にここを視察し、その後の記者会見の中で「ああいう人って人格あるのかね」と発言し、障がい者団体から激しい抗議が寄せられたという事件があった施設です。

話を元に戻します。府中療育センターは福祉施設でありながら当時、民生局（今の福祉局）ではなく衛生局に属し、「病院」のような運営をしており、現在の福祉の考えとはかけ離れたものであったため、「生活の場」としての発想の転換を要求し、三井（旧姓新田）絹子さんをはじめとした入所当事者の方々が大規模な抗議活動を起こし、1972年に都庁前にテントを張り、当事者の方と支援者の方が2年間にわたり座り込みを続け、都政のあり方そのものに抗議をしました。これが「府中療育園闘争」の概略です。これは当時福祉の改革を旗印にしていた美濃部革新都政にとっては、非常に重い課題となったという事です。この時代は社会全体もかなり騒然とした時代でした。